

「池袋清風日記 明治二十二年」資料紹介・翻刻（二）

富 田 知 恵 子

前号に引き続き、『池袋清風日記 明治二十二年』を翻刻する。今回は明治二十二年（一八八九）七月より明治二十四年（一九一）六月までの翻刻となる。

清風は、明治二十年から二十一年にかけて『東京日日新聞』に和歌概論を寄稿し、『郵便報知新聞』に和歌概論を掲載する、など全国に名前を知られるようになった時期で、門人も増え、歌人として充実した日々を送りだした頃である。

目を引く事柄としては、邦光社への引き続きの参加が見られる。邦光社は、門流に固執せず、歌道の振興を目的として発足された全国的な歌道結社で、第一回の明治二十一年から建仁寺で開催されているが、清風は創立時より引き続き歌を寄せている。

また、この頃、清風は牛窓に滞在するなど、岡山とのつながりが深かったようで、岡山県で高粱教会に次いで古いとされる天城教会が明治二十三年に建てられた時には献堂式に歌を、と乞われて三葉の和歌短冊を渡している。

同志社に寄与した人物として土倉庄三郎がよく知られるが、庄三郎の娘、土倉政子が「米国費府」（アメリカ・フィラデルフィア）へ遊学する際に政子の兄に乞われて和歌短冊を揮毫したり、アメリカン・ボード宣教師ゴールドン（ゴードン）のアメリカ帰国に際しては、饒別の品とともに和歌を揮毫した短冊、扇を贈っており、清風の交友関係なども

興味深い内容となっている。

凡例

- ・和歌の記載については、同じ和歌でも細部が異なる場合があるが、作者が意図的に変更している可能性があり、記載のまま記した。ただし、明らかな誤字、衍字、脱字と考えられる場合は右傍に「(ママ)」もしくは正しい字を()に入れて付した。
- ・見せ消しについては、左傍に「ㄣ」印を付し、右傍に訂正された字を示した。ただし墨で数字分塗りつぶされた抹消については■で示した。
- ・作者が文中で故意に数字分空けている空白部分については「^()」で示した。

山落花

ささぬともしらて過にしあし曳の

山のかひより散るさくらかな

月前水鶏

夕月の影もなかる、我門の

いさ、小川に水鶏なく也

山寺蛸

山鳥の杉のはやしの夕くれに

なほひくらしの声そ残れる

みそれ

散り残るくぬきの枯葉風さえて

みそれふるなりをかのへの里

旅行

古郷のおやのよはひをおもふこそ

なかき旅路の重荷也けれ

此日こそ五とせはかりか程或若

さうつくしき貴女の露もかはら

す我こと数ならぬ身をもいと

ねもころにかへり見給へるを涙の

こほるゝはかりかたしけなみて

式嶋のやまとの国に君なくは

こひてふ事はしらさらましを

右短冊六葉に

海辺晚涼

さし残る夕日すゝしく成にけり

浪うちよする浦のまつ原

右扇に

右七首明治二十二年七月

九日昨夕再植田方直氏の乞

にて認め午後におくる尤短冊

三葉は同志社病院看病婦江

二葉と扇は亡兄妻と母女江お

くるへしと也

野津君の身まかりし時

神の為なすへきわさも多き世に

をしきは君か門出也けり

右短冊一葉明治廿二年七月

九日此前より野津氏の友浜光

延の乞にて今日詠するや直に

書て岡山の光延氏に渡す

山溪白雨過

谷の戸に雲を残して晴にけり

よ川の奥の夕立のあめ

森晚涼

夕つゝ日あたこの峯にかたふきて

蟬の音無しみたらしの杜

水辺晚涼

みな底の月影ふみて打わたる

野川のくれそ涼しかりける

右三首明治廿二年七月廿

五日此前後婢の父即新町一条

上ルより乞ひ其扇に書てお

くる

山溪白雨過

谷の戸に雲を残して晴にけり

よ川の奥の夕立の雨

月前水鶏

夕月のかけもなかる、我門の

いさ、小川にくひななく也

水辺晩涼

みな底の月かけふみて打わたる

野川のくれそす、しかりける

海辺晩涼

さし残る夕日す、しく成にけり

浪うちよする浦の松原

雨後蟬

夕立のなこりす、しき山松の

あらしのうちに蟬そなくなる

右五首扇二本に明治廿二

年八月七日備前牛窓の東

寺にて備中玉島港伝道

者撰津の西尾文亭氏の乞

に任せ即書ておくる

寄道述懐

草も木も神のさかえを見する世に

くらきは人のこゝろ也けり

右扇一本に

題おなし

罪の海すくひの船は出し世に

おほる、人のあるか嬉しさ

教の友肥後に伝道に云々

まこゝろをつくしの海にあ曳て(まこ)

神にさゝけむたまを得よ君

右二首扇二本に

右明治廿二年八月十七日備

前牛窓の東寺にて天城教

会信者朽木兼三郎氏の乞に

まかせ書ておくる

子日

春ことにひけともつきぬ小松原

千とせの種は神そまくらむ

山家秋深

賤かやのそのゝさゝくり落そめて

むらさめ寒くなれる秋かな

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

右短冊三葉明治廿二年九

月廿四日岡山の砂場武氏の

乞にまかせ十月十七日書き

十二月廿日朝岡山の伊丹

氏の乞に転しておくる

摩西

なるる河芦間の捨子末終に

大あら波もうちはらひつゝ、

洗礼約翰

いくはくの人の心やあらひけむ

よるたに川の清きなかれよ

救世主

たよるへきすくひの神のなかりけは

いかに悲しき此世ならまし

罪の世にいかにあはれとおほしけん

かりのまくらもさためかねつゝ、

十字架

えひかつら神のみそのゝ一本の

木にかゝりてそみのるへくなる

岡山の旅宿にて

しるへなき旅のやとりに嬉しきは

教のともとへるなりけり

あるとしの秋岡山の里の西なる

田中の道を行とき

都にも今は帰らむ秋かせの

ふきこそわたれをか山のさと

（ママ）
非

岡山の山田のいな葉ふく風の

みにしむくれは都こひしも

岡山の朝日川を下る時

吉備川の流の末にうかひけり

児島の海の秋のよの月

三番といへる旅のやとりにて

船出まつ児島の海の夕まくれ

野分の雲も立まよひつゝ、

右短冊九葉明治廿二年

十月十二日岡山の河本乙五郎

氏の乞にて同十七日書き十八日

朝おくる

夕落花

大井川千とりか測の夕くれに

まつかせ寒く散るさくらかな

海上子規

箱崎の松原こしに月落て

はかたの海になくほとゝきす

山家秋深

賤かやのそのゝさゝくり落そめて

むらさめさむくなれる秋かな

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

潤声幽

我山はおりたつ谷のふかけれは

かすかに水のおとぞ聞ゆる

右短冊五葉明治廿二年

十月三十日夜石光氏母の

乞にまかせ翌三十一日夕書き

ておくる東京に持帰らるゝも

の也

子日

春毎にひけともつきぬ小松原

千とせの種は神そまくらむ

海上子規

箱崎の松原こし月落て

はかたの海になく郭（此）

山家秋深

賤かやのそのゝさ、栗落そめて

むらさめ寒くなれる秋かな

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれ哉

言葉書略す

あまつ日の光をうけてひな鶴も

雲をこひしき音をやなくらん

右短冊五葉明治廿二年

十一月廿二日此前八月末父上

出京途船中にて逢はれたる

延岡の或神官（ママ）と

いへる人我歌をしきりに乞

はれたるよし明日より父上帰

郷に就き此今夕いそきしたゝめ

しも既に荷物を人に渡さ

れし故其後

△月前懐旧

むかし見し影の心（虫掛）に「は

月に袂そぬらさゝらまし

△明治二十二とせの秋尾張の国なる

服部文篤ぬしか二十年回到月

前懐旧といへる事を出して歌乞

はれければ（かく言葉書にせり）

田家秋深

しつかやの垣ねつゝきの（虫指）□はやし

小田もひとつに色付にけり

右短冊二葉明治廿二年十

月頃同志社（ママ） 年生尾張

の服部綾太郎ぬし彼祖父

文篤ぬしの為に乞はれ同十二

月廿日夕書き直におくる

明治廿三年一月三日おもふ友

なる児玉千代子の門出を送る

道すから時雨のふりければ

さためなき世をふりすてゝ行君か

柩のうへにふるしくれかな

死出の山君をおくりし我袖に

この世の雨もうちしくれつゝ、

しての山さかひまでこそおくりつれ

是より後は君ひとりのみ

死出の山雨さへふりてこの（虫指）□

越え行君はいかにさひしき

なつかしき君を送れば死出の山

さかひ越えても行かむとそ思ふ

おもふ友なる児玉千代子か十

八歳あまりにて身まかりけれ

は

あしたに散る花の春もあるものを

君を千代ともおもひけるかな

右明治二十三年二月二日児

玉信嘉氏吾に向ひ今日は千

代子か一ヶ月目なれば今夕父の

宅にて僅の閑にひをなさん来り

給へと乞はれければ短冊六葉

認め持行ておくる

水辺柳

立ならふ柳かもとに来てみれば

野川の水のなかれ也けり

関路花

玉くしけ箱根の関の明かたに

戸させる雲はさくら也けり

首夏藤

しら櫛のみつ枝す、しき梢より

うちなひくなり藤なみのはな

海辺晚涼

さし残る夕日す、しく成にけり

浪うちよする浦の松原

山寺蝸

山寺の杉のはやしの夕くれに

なほひくらしの声を聞ゆる

鳴秋夕

よる浪の外にはおともなかりけり

はなれ小島の秋の夕くれ

草菴時雨

こからしの音さえわたるみよしの、

す、のしのやにしくれふる也

述懐

あし曳の山田のひつち穂にも出す

世にいたつらにかれむ我身か

老たる父君と共に大和の国

にもものしけるととき

たらちねの親と共にも万代を

ふるの高はし渡るけふかな

右短冊九葉明治二十三年

三月十七日京都にて同志社

備前赤阪郡橋本彦作氏の

(我第六社中)乞に任せ十九日夕

に書き

あるとしの春南大路氏と芳枝

といへる女との婚礼を祝ひて

朝日ます南の枝やかをるらん

みやこ大路の梅のはつ花

名所瀧

落つ瀧は滝の水上山猿の

雲に飛ひかふ那智の高山

右短冊二葉明治廿三年三

月十九日夕京都にて前の一

葉は同二月十三日夜大西明

氏の乞に任せて詠み且短冊に

乞はれたるを後の一葉共に書

きておくる

山さとはかきねの梅の咲きしより

みやこの友をまたぬ日そなき

ふるさとのもとあらの小菽露みて

月かけ清し夜や更ぬらん

右唐紙半折の画賛二葉に

明治廿三年三月廿八日夕

此前一月初伊与今治（ついで）の中谷

卯三郎氏より同志社生徒増

田氏に託し乞はれしも多忙に

て今日正午増田氏婦郷催促

ありしも間に合はす此夕認め

四月二日朝吾ふる不在間或生徒

取に來り持行しよし

おのれつねに目もくらむはか

り事しけきに明治廿三年

四月廿日邦光社歌会の兼題

花下言志と云ふ事とあはた、

しく筆をとりて

うつせみのこの世の春の日数たに

花の陰にて経なんとそおもふ

右短冊一葉明治二十三年

四月十九日夜いと疲れながら

直によみて書き翌廿日歌会

に出す

旅宿梅

古郷のいもか垣ねはいかならん

たひねの床に梅か香そする

春江花月夜

大井川入江にうかふ月かけの

なかる、花にくもりけるかな

野径雲雀

はるの野の道の行手のつほすみれ

つまむとすれはたつひはりかな

川五月雨

巨椋の池もひとつに成にけり

よとのわたりのさみたれのころ

水辺螢

くちなしの花もかをりて池水の

岩間す、しく飛ふほたるかな

山家立秋

けさよりは蟬の声こそかはりけれ

我山かけも秋やたつらむ

月

さま／＼の雲のすかたを先見せて

出くる月のおもしろきかな

暮秋薄

行秋の末野の原に夕日さし

はるかにまねく花す、きかな

夕時雨

山の端にかたふく夕日たちまちに

きえぬと見ればしくれふるなり

海辺寒月

すみよしの松のうは葉に露見えて

月こそしらめあはちしま山

述懐

うつせみの我世は秋の野へなれや

過行ま、に袖そぬれぬる

懷旧非一

さま／＼にすきしむかしをしのふれは

我世も遠きこ、ちこそすれ

海辺眺望

山松の暗き木の間にわたつみの
沖のしろくも見えわたるかな

故郷草

古郷の池のあし原水かれて
す、きましかになりける哉

右短冊十四葉明治二十三年

四月二十二日宵此前十八日同志

社四年生肥後八代の蓑田林蔵

氏の乞にて認め同廿五六日本人

取に來り渡す

子日

春ことにひけともつきぬまつ原

千とせの種は神そまくらむ

海辺子規

箱崎の松原こしに月落ちて

はかたの海になくほとゝきす

暮秋菊

うれしくもくれ行秋をと、めけり
庭のまかきのしら菊の花

草菴時雨

こからしの音さえわたるみよしの、
す、のしのやにしくれふる也

述懐

あし曳の山田のひつち穂にも出す

世をいたつらにかれむ我身か

右短冊五葉明治二十三年

四月廿三日夜今夕(マツ)富山県越

中砺波郡佐々木盛昌と云人

偶來訪乞はれたるに任せ書き

翌廿四日夕本人に渡す

備前の国天城は人戸凡三百はか

りの中神を知るの家は僅に十三

四戸のよしなるにこたひ七百余

円の金もて新に会堂（天城教舎）を建てた

るはよのつねの事とおほへす

されは其猷堂式に歌をとこは

れければ

殊更に神の光の見ゆるかな

うへも天城の名にこそおひけれ

新宮にうれしくうたふ声す也

神のみさちもあらたまるらむ

この里のいくらの人かのほるらん

天つみ門はひらけそめけり

右短冊三葉明治二十三年

四月廿六日夕に前廿三日加藤

寿氏来て乞へるにまかせ書き

同廿八日夕渡す

春江花月夜

大井川入江にうかふ月かけの

なかる、花にくもりけるかな

水辺晩涼

みな底の月影ふみて打渡る

野川のくれそ涼しかりける

山秋夕

高ねには夕日のなこりさしなから

山陰さむしあきの夕くれ

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

寄道述懐

かねてよりなれし此世も今はとて

別る、時のこゝろもかな

右極上短冊五葉明治廿三年

五月廿五日同志社女学校卒

業生大和の土倉政子明日

京都発モリス氏夫婦に随

行米国費府に遊学彼地江

の斎物として前夜見

よりの乞に任せ書て送る

関路花

玉くしけ箱根の関の明かたに

戸させる雲はさくらなりけり

海辺帰雁

霞ともなみともわかぬこしの海の

沖にきえ行あまつかりかね

海上子規

箱崎の松原こしに月落ちて

はかたの海になくほと、きす

水辺晩涼

水底の月かけふみて打わたる

野川のくれそす、しかりける

谷秋夕

しら雲の外になかめむものもなし

横川の谷の秋の夕くれ

山家秋深

賤かやのその、さ、くり落そめて

むらさめ寒くなれる秋かな

述懐

あし曳の山田のひつち穂にも出す

世をいたつらにかれむ我身か

大和の国にもものしける時三輪の

山をはるかに見て

待つ人のありとはなしに立しきは

はるかに見ゆる三輪の山もと

右短冊八葉明治二十三年六

月廿六日同志社生徒越後与

板の三輪源造伊予今治の村

上春太郎両氏の乞にまかせ書

きておくる

はしめて東京にもものしける道

にて

うつゝにはけふこそ見つれ夢にさへ

なつかしかりしふしの芝山

右扇に明治二十三年七月十

五日夜東京津田氏にて仙氏

の乞にまかせ書きておくる

言葉書前に同し

うつゝにはけふこそ見つれ夢にさへ

なつかしかりしふしのしは山

ぬは玉の夢にはあらで嬉しきは

はしめて見へるふしの芝山

鳥がなくあつまののたゝひとり

立しき君はふしのしはやま

述懐

あし曳の山田のひつち穂にも出す

世をいたつらにかれむ我身か

老の浪袖の浦までよすると

我おもふかひはひろひあけてむ

右短冊(疎品) 五葉明治二十

三年七月十七日東京徳富氏

にて母上久子の乞にまかせ即ち

書きておくる

故郷梅

ふるさとのあれし垣ねの朧夜に

むかし恋しき梅か香そする

水辺晩涼

水底の月かけふみて打わたる

野川のくれそすゝしかりける

山秋夕

高ねには夕日のなこりさしなから

山陰さむしあきの夕くれ

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

旅情

古郷のおやのよはひをおもふこそ

ななき旅路の重荷也けれ

右短冊五葉

はしめて車路の旅にものしける時

うつゝにはけふこそ見つれ夢にさへ

なつかしかりしふしの芝山

秋立ける日西鎌倉なるみたれ

橋てふ所にかりねして

あまかやの旅ねの夢にひゝく也

秋をよせくる由井の浦なみ

右書画帖二ヶ処江

右七首明治二十三年八月

廿二日鎌倉にて八幡前杉浦

翁の乞にまかせ書きておくる

故郷梅

故郷のあれし垣ねの朧夜に

むかし立しき梅か香そする

関路花

玉くしけ箱根の関の明かたに

戸させる雲はさくら也けり

海上子規

箱崎の松原こしに月落ちて

はかたの海になくほとゝきす

海辺晚涼

さし残る夕日すゝしく成にけり

浪うちよする浦のまつ原

言葉書略す

あまかやの旅ねの夢にひゝく也

秋をよせくる由井の浦浪

山家秋深

賤かやのそのゝさゝくり落そめて

むらさめさむくなれる秋かな

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

連山雪

あたこよりひえにつらなる北山の

高ね^ををしなみふれるしら雪

旅情

古郷のおやのよはひをおもふこそ

ななき旅路の重荷なりけれ

はしめて車路の旅にもものしける時

うつゝにはけふこそ見つれ夢にさへ

なつかしかりしふしの芝山

右短冊十葉明治二十三年八

月二十二日鎌倉にて東京社

中十名(男女)江各一はづゝ

として書き同地成就院に避

暑の磯貝氏に渡す

五月節句大将人形

君か代は年のさ月の祝ひ日に

よろふ姿を見るのみにして

六月祇園祭山鉦

人みなの都大路にみちくゝて

鼓のおとのあつきけふかな

七月田舎盆踊

この夕豊としようたふ声すなり

門田^ま田のをと女今踊るとし

十一月諸祠火焚祭

里の子はやしろの朝たつと見て

さむき冬日もわすれはつらむ

十二月歳暮茶せん売僧

のりの師のものうる声に一年の

はかなき夢もさめしけふかな

右短冊五葉明治二十三年

十月十二日此前京都の松井

宗七氏来り長崎の人の頼と

て右五ヶ月の画短冊五葉を

示し額こひければ前短冊に書

きておくる

和歌山なる森ぬしの六十賀に寄

松祝といふ事を出されければ

君かすむやとの松かせ却まで

千代のしらへのきこえけるかな

右短冊一葉明治廿三年十一月

九日此前十月廿八日森田氏妻

来り曰く妹の旧先生林昭正と云

人和歌山の人にて其友同地の

祠官森弥太郎といふ人の六十

賀に特別に御詠をと申来

りたれば云々願ひたりと即

ち今日詠み直に書きて送る

（無題）

なてしこの花のさくまでかゝりつる

山くみの露に袖もぬれつゝ、

右短冊一葉明治二十三年十

一月廿二日此春頃より寺阪氏

に依て美作の合田氏母の乞に

まかせ母に代りてよみつゝ書き

ておくるこれは母より或人に

おくれる為也

山落花

さきぬともしらて過にし足曳の

山のかひより散るさくらかな

谷残雪

日影見ぬよしのゝ谷の小笹原

はなのころまで雪そ残れる

首夏水

あたらしくつみしこのめにうの花の

垣ねの水を汲みてけるかな

海上子規

箱崎の松原こしに月落ちて

はかたの海になくほとゝきす

谷秋夕

しら雲の外になかめむものもなし

横川の谷の秋の夕くれ

山家秋深

賤かやのそのゝさ、栗落そめて

むらさめ寒くなれる秋かな

月前時雨

うき雲のさためなき世の影みせて

月すむ夜半にふるしくれかな

連山雪

あたこよりひえにつらなる北山の

高ねをしなみふれるしら雪

旅情

古郷のおやのよはひをおもふこそ

ななき旅路の重荷也けれ

述懐

あし曳の山田のひつち穂にも出す

世をいたつらにかれむ我身か

言葉書略す

ありし世はかへらぬ水に大井川

花のかけさへかすむ春かな

潤声幽

我山はおりたつ谷のふかければ

かすかに水のおとそ聞ゆる

右短冊十二葉明治二十三年

十二月十六日宵旧友鹿兒島

県知覧の宮原直二来訪十

余年振に面会直に乞ひけ

るにまかせ書きておくる

遠山残雪

春かすみ立そめしよりかすか山

雪のひかりものとけかりけり

春江花月夜

大井川入江にうかふ月影の

なかるゝ花にくもりけるかな

水迎新樹風

谷陰の若葉をわたる朝風に

しみの花ちる山の井の水

江上夕立

蓮葉に玉を砕きて大くらの

入江をわたるゆふたちのあめ

山寺蟬

山寺の杉のはやしの夕ぐれに

なほひくらしの声を聞ゆる

月前鹿

高まとのそのへに立てなく鹿の

かけさへ見ゆる山の端の月

夕時雨

山の端にかたふく夕日たちまちに

さえぬと見ればしくれふる也

連山雪

あたこよりひえにつらなる北山の

高ねをしなみふれるしら雪

故郷草

むかしに池のあし原水かれて

す、きましりに成にけるかな

往事如夢

はかなくもこしかたのみを夢にして

今はうつゝとおもひけるかな

右短冊十葉明治二十四年

二月廿三日夜昨年十二月十日

頃同志社別課生

金田辰馬氏の乞はれたるを今

夜書き後日渡す

草菴春雨

鶯の声のとかなるをかへの

くさのいほりに春雨そふる

春江花月夜

大の井入江にうかふ月かけの

なかる、花にくもりけるかな

首夏藤

しら檜のみつ枝す、しき梢より

うちなひくなり藤なみののはな

水辺螢

くちなしの花もかをりて池水の
岩間す、しくまふほたるかな

秋のうたの中より

くれ竹のふしみのわさ田色つきて

雁そなくなる秋きぬらし

山家秋深

賤かやのその、さ、くり落そめて

むらさめさむくなれる秋かな

山家落葉

もす鳴て夕日きえ行山さとの

垣ねさひしく散るもみちかな

連山雪

あたこよりひえにつらなる北山の

高ねおしなみふれるしら雪

海辺眺望

山松の暗き木の間にわたつみの

沖のしろくも見えわたるかな

山家夢

今更におもひ捨たるうつせみの

うき世のなとか夢に見ゆらむ

右短冊十葉明治二十四年二

月廿三日夜及翌夕に前二十日

朝伊予今治の中谷氏来て乞は

れたるを書き後日増田氏に渡

す

暁鶯

有明の月もかゝれる我窓の

うめの梢にうくひすのなく

月前鹿

高まとのをのへに立てなく鹿の

かけさへ見ゆる山の端の月

あめりかの女それかしおのれの

国に帰りける時

もろともに此世の中になからへて

ふた、ひあはむ時をこそまで

右上短冊三葉明治二十四年

三月八日村山合藏氏来り神戸

川本女よりこたひ彼女学校教

師米国の某女国に帰る別れ

におくるへしとて乞ひければ

同十日夜書き翌日村山氏に

渡す

肥後の国なる松崎雅ぬし七十

賀に寄松祝の心にて願こはれ

ければ

七そちの坂ははるかに越はて、

君や行らん千代のまつ原

右短冊一葉明治廿四年三月

廿一日此前より第六後社肥

後の北里蘭ぬしより乞はれし

に任せ書ておくる

長崎なる中島広行ぬしの

八十賀に歌こはれければ

千年山のほらむ君かけふこゆる

やそちの坂はふもと也けり

ちとせまでいきの松原逢ければ

世をなかさきに君やすむらむ

雉子

おほろにも尾上のさくら打霞み

ふもとの野へにきしすなくなり

右短冊三葉明治廿四年三月

廿一日昨夜長崎より京都の

松井宗七氏手紙をおくり彼

地の歌人中島広行翁八十賀

四月三日開会の広告を示して

乞はれければ書て本日郵便

よりおくる

こたひ清水君の婚礼を賀

して

萬代をふる川のへに植てけり

けふをふた葉のふた本の杉

右短冊一葉明治廿四年

四月八日に先日清水泰次郎

君大和の郡山より来十一日には

婚礼すとて乞はれければ書て

おくる

春山月

高野山かすまぬ月の影ふけて

ましらなたねのさむき春かな

右短冊一葉明治二十四年四月

八日昨夕遠藤千胤氏来り例

年の邦光社歌会来十二日建

仁寺方丈にて執行兼題を渡

されければ今夕詠し直に書き

翌日堤翁に託す

山溪白雨過

谷の戸に雲を残してはれにけり

よ川の奥のゆふ立のあめ

水辺晚涼

みな底の月かけふみて打わたる

野川のくれそす、しかりける

右扇に明治二十四年五月三日

夜速水忠雄氏の親類備前

の某よりの乞にて書ておくる

水辺柳

立ならふ柳かもとに来てみれば

野川の水のなかれ也けり

水辺晚涼

みな底の月かけふみて打わたる

野川のくれそ涼しかりける

月前鹿

高まとのをのへに立てなく鹿の

かけさへ見ゆる秋の夜の月

橋上落葉

谷川のはし打わたる山かつか

つま木のうへにちるもみち哉

教ぬしなるゴルドン氏かあめりか

に帰られける別れに

諸共に此世の中になからへは

ふたゝひあはむ時をこそまで

右短冊五葉に

山溪白雨過

谷の戸に雲を残してはれにけり

よ川の奥のゆふたちのあめ

海辺晚涼

さし残る夕日すゝしく成にけり

浪うちよする浦のまつ原

右扇一本に

明治二十四年六月二日に明三

日ゴルドン氏京都を出立米

国に帰られけるよし今日書き

て氏江饒別品にそへておくる

旅宿梅

古郷のいもか垣ねはいかならむ

たひねの床に梅か香そする

折にふれたる

ひかし山ふもとの花の雲間より

のとかにひゝくかねの音かな

川五月雨

巨椋の池もひとつに成にけり

よとのわたりのさみたれの頃

雨後晚涼

しら雲に入日の影はさしなから

夕立はれし雲のすゝしさ

月前鹿

うちかれのあさちか露にあり明の

月もやとりてむしそなくなる

山家秋深

しつかやの園の草むらもすなきて

朝きりさひし山のへのさと

湖水

はるかにも人の往来の見ゆるかな

氷りにけらし諏訪のうな原

海辺寒月

すみよしの松のうは葉に霜見えて

月こそしらめあはちしま山

老たる父君と共に大和の国にもの

しける時

たらちねのおやと共にも万代を

ふるの浮はしわたるけふかな

高千穂山の奥なる温泉にもの

しける時

いくたひかかりねの夢にさはるらん

峯の松かせ谷川の水

右短冊十葉明治廿四年六月

四日小野英二郎氏来り彼親類な

る岡山の某の乞とて持来られ

同二十日に書き後廿一日小野氏

に渡す

月前水鶏

夕月のかけもなかる、我門の

いさ、小川に水鶏なくなり

山秋夕

たか根には夕日のなこりさしなから

山陰さむしあきの夕くれ

あるとしの秋天草灘をすくる

ほと

にしの海の浪路はるくくれそめて

夕つ、高しあまくさの鳥

右短冊三葉明治廿四年六

月二十日に去月十六日同志社

生徒備前邑久郡山崎惣次郎

の乞はれけれ今日書き翌廿

一日夕伊丹氏より本人に送る

水辺新樹風

谷陰の若葉をわたる朝風に

しひの花ちる山の井の水

あるとしの夏大隅なる桜嶋の温

泉にもものしけるとき

かりねするあまか賤やの明かたに

山ほと、きすはつねなくなり

水辺蛩

くちなしの花もかをりて池水の

岩間す、しく飛ふほたるかな

川五月雨

巨椋の池もひとつに成にけり

よとのわたりのみみたれのころ

水辺夏月

かやり火のけふりなかる、里川の

浪間にうかふ月の影かな

右短冊五葉明治廿四年六月

二十日に去十二日着今治中谷

氏の手紙に彼社中優点者に

褒賞用として乞はれ今日書き

翌廿一日夕伊丹氏に託し今

治の増田氏に渡さしむ

谷残雪

日かけ見ぬよしの、谷の小笹原

はれのころまで雪ぞ残れる

水辺晩涼

みな底の月かけふみて打わたる

野川のくれそす、しかりける

山家秋深

賤かやのその、さ、くり落初て

むらさめさむくなれる秋かな

連山雪

あたこよりひえにつらなる北山の

高ねおしなみふれるしら雪

寄道述懐

草も木も神のさかえを見する世に

くらきは人のこゝろ也けり

右短冊五葉明治廿四年六月

廿八日に一昨日第六カ後社播磨

の橋南浩氏今後舞鶴に伝

道すとして乞ひけるに任せ今日

書き翌廿九日夕本人に渡す